山口日独協会ニュース

Neuigkeiten der Japanisch-Deutschen Gesellschaft　Yamaguchi

Nr.１２２，November　2015

山口日独協会　〒753-0083　山口市後河原94
Japanisch-Deutsche Gesellschaft Yamaguchi:
Ushirogawara 94, Yamaguchi, 7530083, JAPAN
TEL/FAX : 083-920-2965
http://www.jdg-yamaguchi.jp/　info@jdg-yamaguchi.jp

協会からのお知らせ

１ クリスマス会（Weihnachtsfest）開催のご案内

山口日独協会の毎年の定例行事、クリスマス会を開催します。参加者は、料理一品持ち寄りをお願いします。料理の種類は問いません。ドイツ歌曲、ゲーム等楽しい企画、おみやげが盛りだくさんです。もちろん、ドイツワイン・ゼクトは、各種揃えています。

参加される方は１２月２日までに、各理事か上原理事長までお知らせ下さい。

・日　時　：　2015 年 12 月 5 日（土）15 時～18 時
・会　場　：　山口市大殿地域交流センター（山口市大殿大路 120-4）
・会　費　：　会員無料、会員外 500 円

２　行事のご案内

山口ワールドクリスマスマーケットが、下記のとおり行われます。山口県立大学等の主催で、文部科学省「グローバル人材育成推進事業」を受け今年で第３回の開催です。

クリスマスマーケットはドイツが本場、山口日独協会も参加し、グリューワイン、ドイツパン・ソーセージ等を提供します。皆さんもお出かけください。
また当日会場でのお手伝いして頂ける方を募集しています。

・日時：2015年12月11日（金）17:00～20:00、 12日（土）11:00～20:00、 ※小雨決行
・場所：山口市一の坂川交通交流広場（山口市中河原町）

３　行事の報告

ドイツ祭り（Deutsches Fest）を10月31日(土),11月1日(日),山口市一の坂川周辺で行われた「アートふる山口」に合わせて開催しました。

２日の内のどちらかは雨！のジンクスも今年ははずれ、両日とも天気で多くの方が来場されました。の皆さん、有難うございました。

４　会員の皆さんからの投稿、情報提供

(1)仁木達雄さんからの投稿です。7 月山口日独協会実施のドイツ･ツァーの紀行です。
次ページに掲載しています。

(2)「クリスマスコンサート」

日時：11 月 29 日（日）14 時開演、13 時 30 分開場

場所：防府市防府カトリック教会

演奏者：オーボエ；冨田博之、ピアノ；徳冨信恵、ヴァイオリン；八木資義

冨田さん、徳冨さんは日独協会会員です。　＜チラシを同封しています＞

(3)「キネマと音楽の夕べ in やまぐち」

日時：12 月 1 日（火）18 時 30 分開演、18 時開場

場所:山口県教育会館　＜チラシを同封しています＞

(4)山口県交響楽団演奏会～創設 60 周年記念

日時：12 月 6 日（日）14 時開演、13 時開場

場所：山口市民会館　＜チラシを同封しています＞

(5)　「第 43 回山口県芸術演奏会」

日時：12 月 13 日（日）13 時 30 分開演、13 時開場

場所：周南市文化会館大ホール　＜チラシを同封しています＞

日独協会会員冨田さんが、オーボエを演奏されます。

(6)日本のクリスマスは山口からクラシックコンサート

・日時：12月23日（水･祝）開場14：30、開演15：00
・場所：山口県教育会館
・曲目：＜クリスマス関連の曲を演奏＞
第1部(ハンドベル)　・シュルンマーリート
第2部(ピアノ独奏)　・石田成香
第3部(オーケストラ)　・山口県立山口中央高校オーケストラ部
アンダーソン：そり滑り、ほか
第4部(コーラス・オーケストラ合同)
ヘンデル：ハレルヤ、バッハ：「主よ、人の望みの、喜びよ」、清しこの夜
・入場無料

＊お問合せは、各理事か上原理事長へご連絡をお願いします。ﾒｰﾙでも結構です

上原（TEL:083-920-2965,090-5269-4941・ﾒｰﾙ:info@jdg-yamaguchi.jp）

＜会費納入のお願い＞

本年度の会費未納の方は、下記の要領で納入いただきます様お願いします。

会費：法人；10,000 円、一般;2,000 円、家族;1,000 円、学生；1,000 円

【会費納入方法】　振込先：

・郵便局　口座番号；01550＝9＝　26140　加入者名；山口日独協会

・山口銀行県庁内支店　口座番号；6171166　加入者名；山口日独協会

ふ ら り ド イ ツ

仁 木　達 雄

ぶらり、というかふらりと旅に出た。と言っても無計画な一人旅という訳ではない。山口日独協会主催のレッキとした独逸バイエルン州西北のマインフランケン・ツアーだ。気ままで呑気でスローでちょっとゼイタクな旅を愉しみませんか、とのオーバーヴィーゼの上原さんに誘われ俄然その気になった。滞在地のマルクトハイデンフェルトと舌を噛みそうだが、そこはエムデ・アンゲリカさんの故郷で上原理事長夫妻も何度か訪ねられた所という。そんな訳で皆さんが心を配られたプランにおんぶに抱っこ、従って全ての手間も省けあれこれ考える事もなくとても気が楽だ。そもそもナゼ俄(にわか)にそんな気になったか少し説明しておこう。

今年の夏は戦後 70 年、という事でこと更なにかにつけかまびすしかった。メディアはこれでもかとばかり悲惨な戦争の記憶を掘り起こした。心ある国民は安保法制の審議のチグハグな行方にイラつき、それに首相の戦後 70 年談話で何を言い出すのやらと神経を尖らせた。そんなこんなの状況に甚だ辟易し、寝苦しい熱帯夜が日本中をフラストレーションの渦の中に包み込んだ、と言ってはチト言い過ぎか。どこかでそんな日本のカオスから距離を置いていたい、日本を脱出して頭を冷やすのが最善、『そうだ、避暑がてらに白夜のドイツに行こう』と相成った。

ラインやマイン河の蛇行の傾斜地に幾条にも拡がるブドー畑（ワイン畑と言う人もいるが？）は恐らく 2 千年以上もちっとも変わらずさんさんと太陽の恵みを受けてきたであろう。

以前からそんな絵になる素朴な景観をうっとり眺めてきた。もちろん畑の中に分け入った事もブドウの房を間近で見たことも無い。それどころか正統派のワインに敬意を表しキチンと向きあい正しく賞味した事もない。「どうせ説明した所で無駄であろうが・・・」とばかり必要以上に色々うんちくを垂れる御仁には中々ついていけない無粋者なのだ。でもマア生涯に一度くらいワインに浸りきるのも良かろうと、ワイン音痴のまま何の予備知識も仕入れぬままに出かけたという次第。何を隠そう恥ずかしながら吾らは赤玉ポートワインの赤くて甘い葡萄酒にそこはかとない愛着を抱いてきた世代。赤玉の葡萄酒こそがワインと思い込んで育った無知蒙昧なやからには本場で本物のワインを味わう資格などあろうはずが無い。

マアそんな前置きはさておき、総勢 12 名の参加者はいずれもドイツに何かの縁や思い入れがおありのようだ。ドイツ生活永き方、ドイツがべたべたに好きとういう御仁、留学経験者、大学の研究テーマにドイツ宗教史？を原書で読んだという剛の者等々、そしてどなたもドイツワイン愛飲家。かく言う私はと言えば息子の嫁がマインツ出身、そしてゲルマンの血の混ざった乳呑みの孫がいる。今回のツアーの内容については先号の伊藤敬さんの紀行文や以前の上原夫妻のレポートに詳しいので省略し、何となくドイツ行で思い考えさせられた事を少しく書き足して私の役目としたい。

ドイツと日本は先の大戦で同じ負い目を持つ敗戦国、その今をどう見ているのだろうか。

よく引合いに出されるのが戦後 40 年の西独ワイツゼッカー元大統領の有名な演説で『先人は重い遺産を残した。誰もが過去を背負わなければならない。‥‥‥若者は当時の事に責任はない。だが歴史から生み出されるものに責任はある‥‥』と格調高い。メルケル首相も『ナチス時代の記憶を世代を超えて受け継ぐ‥‥‥その過去の出来事に真摯に向き合う特別な責任がある』と。事実、以前私がミュンヘン郊外のダッハウ収容所跡を訪れた折り、中学生くらいとおぼしき生徒達に先生が一生懸命に説明している姿が強く印象に残る。きっと言い難い歴史的事実を語っていたのであろう。過去の負の遺産を世代を超えて真正面から向き合う姿を垣間見た。そういった過去の非を全面的に認める勇気を持ち続けているからこそ、こうして現在ＥＵの盟主として近隣の信頼も厚いに違いない。今、難民受入問題に苦心しつつもその主導的立場に強い贖罪意識を感じる。片や日本はどうだろうかと考えさせられる。歴史に終止符は無く根が深い難しいテーマだ。そんな事を考えながらフランケン地方のあちこちでワインを味わってみた。酸味が強い。

このドイツの片田舎は絵になるおとぎの町、夕刻マイン河沿いのクルミの実のたわわなる大木の下の屋外ガーデンに多くの人が参集。料理は余りとらずただひたすらビールやワインを呑み喋り笑う。白夜の夕陽が沈むまで呑むが日本の酒席のような喧噪や醜態は無い。心地よい涼風と景色を心底楽しみ、あちこちから聴こえる力強い歌声がドイツらしい。マイン河は過去幾度も氾濫の歴史を持つ。ふとフランケン人になった積りで中世のこの町に思いをはせる。

某日は 35℃にも達する昼下がりの暑さの中、葡萄畑の中腹で何代も続く実直そうな畑主から栽培のご苦労を伺う。後継者も育っていると嬉しそうに汗をぬぐう。眼下にはマインの湾曲と赤い屋根の集落、遠くは果てしなく広がる穀倉地帯か。そして脱原発の国の風車が妥協はしないぞとばかり遠くに林立する。こののどかな田園風景、片や喧噪の日本、この大いなる違い、しみじみ感じるものがある。折しも何処も夏祭りのシーズン、この村のあの畑でとれたワインで老若男女、善男善女の村人がこぞって相集い、ここでも呑み笑い歌う。平和とはこんな些細で平穏な喜び、かってはこの国と戦争の為に同盟を結び、そして大きな過ちをおかした。何処の国とでもこうして呑んで語りあえば友情が芽生えるのに、どうして政治向きの話になると国と国が角突き合せてしまうのか。随分飲んで、地平線に沈むとても遅い夕陽を眺めながら国とは国民とは？と考えてみるがよく解らない。それにしても幼な子は天使そのもの、その内、天女になると思いきや、さに非ず。メルケル風の偉丈夫？になる。　　かって英国に鉄の女サッチャーがいたが、今ドイツに鋼の女メルケルありか。強い意志をもつ指導者である事に敬意を表す。

ところでドイツ人の健啖ぶりにはいつも舌を巻く。肉食故に顎が発達、シャープなマスクで彫が深く若い男性の平均身長は178㎝とか。日本に来たらすぐにでも誰もが男優になれそうだ。我が大和民族とは全てにおいて異なるからして思考も行動も違って当然であろうが、お互い平和を希求する心情に遜色あるまい。

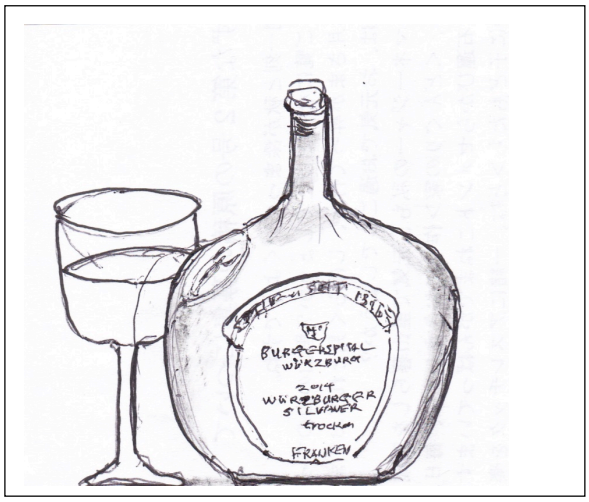
さて、今回のメインのワイン・テイスティング（味見会）がさる夕刻、四百年前の大きな古樽の沢山ある地下の冷気ただようワイン蔵で厳かに？行われた。お互いに向き合い威儀を正して座し、ホテルオーナーのD氏からワインのあれこれを聊か緊張しつつ傾聴する。氏は脳生理学の物理学博士で 193 ㎝の物静かな紳士。まずはグラスの持ち方、揺らし方、そしてシュルシュルと音をたてての舌に絡ませ方と中々奥が深い。日本酒はグビリと呑むがワインはグラスでグルグル回して香りと色を愉しみ、しかる後口中で数回シュルシュルと味蕾になじませ、しみこませる感覚だ。その時、眼はどうする、半眼にしてワインの生い立ち等をしみじみ考えるべきか‥‥と。

博士曰く『これは 2014 年、ここクルースベルグの畑でとれたシルバーナという種類の葡萄でトロッケン（辛口）なるぞ、清新で跳ねる感じがお解りか？』と。確かにそんな感じかと納得するしかないが正直私の味覚は発達していない。何しろ赤玉ポートワイン世代なる故。そんな感じで 6 種類のワインを一つずつ神妙な面もちで由緒正しく丁寧にテイスティングが終了。少々疲れもしたが歴史の重みと平和の安らぎを感じつつ極上のひと時をしみじみ味わえた。

乾杯はビールの時はプロースト、ワインの時はツム・ヴォールと言う。この旅で何度『ツム・ヴォール！！』と叫んだ事か。

8 日間のツァーが終わり、3 日居残ってマインツに行った。丁度嫁は帰省中で、9 ヶ月の孫は紛れもなくゲルマンの血が流れたくましく育っていた。

この旅を契機に山口日独協会に加入させていただきました。残念ながら、ドイツ語の発音の難しさにハナからお手上げで、言わざる聞かざるのテイタラク、何もお役に立ちませんがよろしくお願い申し上げます。



仁木さんの自筆です

鳴門市ドイツ館のご紹介

徳島県鳴門市にある鳴門市ドイツ館で開催される「ドイツと日本を結ぶもの―日独修好150年の歴史」のご案内です。チラシを同封しました。

鳴門市ドイツ館のご紹介は以下のとおりです。ベートーヴェン：交響曲第9番「合唱」の日本初演の地としても有名です。私上原が、ドイツのトリアーを訪れた際、トリアー独日協会のヨハン・アウバート会長が、「私の最も尊敬する人物は、坂東ドイツ捕虜収容の松江所長だ！」と言われ、同席していたドイツ人に情熱的に語られたのが、とても印象に残っています。

（鳴門市ドイツ館ホームページより）

大正３年、第一次世界大戦に参戦した日本は、ドイツの租借地であった青島を攻撃し、約4,700人のドイツ兵を俘虜として日本各地の収容所に送りました。このうち四国の徳島、丸亀、松山にいた約1,000人が大正６（1917）年から同９（1920）年までのほぼ３年間を、鳴門市大麻町（当時、板野郡板東町）の板東俘虜収容所で過ごすことになりました。

この収容所では、松江豊寿所長をはじめとする管理スタッフが、俘虜たちの人権を尊重し、できるかぎり自主的な運営をみとめたため、自由で快適な収容所生活を楽しむことができました。彼らの活動は驚異的で、所内に８０軒余りの商店街、レストラン、印刷所、図書館、音楽堂、科学実験室、公園、別荘群などの施設を造るほか、健康保険組合、郵便局などの互助的活動も行いました。また、学習、講演、スポーツ、音楽、演劇など文化活動も盛んで、とりわけ音楽活動では、ベートーヴェンの「交響曲第九番」の国内初演をはじめ、複数のオーケストラや様々な楽団が１００回を超える演奏活動を行いました。

所外においても、俘虜製作展覧会や各地での演劇、演奏会活動など、ドイツ文化を広く市民に紹介しています。その他、 牧畜、製パン、洋菓子鳴門市ドイツ館、西洋野菜栽培、建築、スポーツなど様々な技術をもたらし、なかには現在もそれが受け継がれているものもあります。これらのイベントや技術指導によって、俘虜たちは地域社会に受け入れられ、板東の町やその周辺では、地元の人々と日常的に交歓する風景が当たり前のようになりました。

ドイツ館は、このようなドイツ兵俘虜と地域の人々との交流を顕彰するため、昭和４７（1972）年、元俘虜たちから寄贈された資料を中心に建設されましたが、築後２０年をこえて施設の老朽化や収集資料の増加により手狭になってきました。そこで平成５（1993）年、東四国国体のメイン会場の１つが鳴門市となったことを記念して、新ドイツ館の建設が計画され、同年10月13日に現在の地に新築移転されました。